

国文学研究資料館報

第32号

平成元年3月

藤園堂文庫調査の記

岡本 勝

一

藤園堂は、有名な名古屋の古書肆である。御当主伊藤健氏は、当然のことはいえ古書の大変な目利きで、研究者の中にも書物について、氏の教えを受けた人は多い。かくいう私もその一人で、かねてから仲間内では藤園堂学校の生徒などと、戯れに名乗ったりしている。

健氏の父為之助氏も、古書肆として知られた人で、とりわけ俳書について詳しく、その手で発掘されたものには、西鶴の下里知足宛書簡（現在、天理図書館蔵）などがある。健氏は、早くから為之助氏の薫陶を受け、古書に関する豊富な知識と経験をもとに、郷土物、特に俳書の収集に

心掛けてこられた。

名古屋には、先年発展的に解散したさるみの会という、俳諧研究の団体があつた。その会員の多くは、個人的に大なり小なり藤園堂蔵書のお世話になつたのであるが、会としても種々ご迷惑をおかけした。中でも、すでに故人とされた市橋鐸先生の米寿記念として、会で編集した「尾三古俳書解題」（昭57）は、全面的な協力によつて出来上がったものであつた。その蔵書を拝見するために、会員が入れ代わり立ち代わり、お宅にお邪魔して調査させていたたり、また、「解題」の出版に当たつては、資金の面でもご助力をいただいた。

「解題」への協力は、ある意味

藤園堂文庫調査の記……岡本 勝……………	1
次一文庫紹介①「岩波古館」……………	3
共同研究報告……………	4
目新取資料紹介②……………	6
新取和古書抄……………	7
叢 報……………	8
第十二回国際日本文学研究会……………	8
利用者へのお知らせ……………	9
平成元年度春季学会開催一覽……………	10

一
で蔵書の公開に踏み切る、ということでもある。勿論、為之助氏の時代から、資料の閲覧に訪れる研究者はあつたが、その多くは親しい人々であつた。「解題」作成のために蔵書の多くを提供することは、今後親疎を問わず研究者の訪れる可能性を生むことである。また、古書肆としての立場でいえば、商品と蔵書とを厳密に分ける必要に迫られる、という問題でもある。そうした点を種々心配しながら会の代表は、「解題」の話を持ち出したのであるが、健氏は大変爽やかににお引受下さつたのであつた。

もなく藤園堂文庫と呼び始め、まるで昔からの名称のように定着したのであつた。また、岩波書店刊の「国書総目録」に藤園とあるのは、現在の藤園堂文庫本ではなく、為之助氏の収集によるもので、戦後早い頃に氏自身の手で処分された由である。

この「解題」がすでに刊行されていたので、今回の資料館の調査を、大変スムーズに行うことができたと言えよう。

渡辺守邦氏から藤園堂文庫調査について、相談を受けた私は、健氏とも話し合いながら調査員の人选を行つたが、従来から健氏と親しく、名古屋とも縁の深い早稲田大学の雲英末雄氏以外は、全て名古屋を中心とする若手研究者ということにした。メンバーは、塩村耕（椋山女学園大）、長島弘明（名古屋大）、服部仁（同朋大）、服部直子、早川由美、母利司朗（岐阜大）の各氏である。

なお、今まで述べてきたところでお分かりのように、藤園堂文庫という名称は、健氏自身による命名ではない。その蔵書を利用した者が、論文などの中で、誰からと

昨年五月の調査委員会議や六月の日本近世文学会で、藤園堂文庫調査のメンバーと会つて日程など

の調整を行い、健氏のご都合をも伺った上で、七月二十日から二十四日までと、八月二十日から二十五日までの十一日間を調査期間と決めた。調査対象となる藤園堂文庫の俳書の数が、約六百点ということなので、一人一日に十本の調査ができるものとするが、約八日で完了する計算になるが、少し余裕を持たせた日程にしたのである。

調査の計画が決まった頃、健氏自筆の調査対象の俳書目録をお貸し下さった。早速そのコピーを二部作り、一部は渡辺氏に送り、一部は手元に残して原本をお返しした。また、調査と並行して撮影も行うことになったが、そのいずれもが健氏のお申し出で、お宅において行われることになり、幾重にもご迷惑をおかけすることとなったのである。

三

初日の七月二十日は、資料館から渡辺氏と竹下義人氏が参加され、八人の調査員も全員顔を揃えた。いくつかの罐に収められ、ほぼ時代順に整理された俳書を取り出して、調査員が次々とカード化していく一方で、撮影が行われた。

部屋の境の戸を開けて、クーラーを付け続けるという状態であったが、撮影の照明と人いきれで、一向に涼しくならない。とりわけカメラマンは、照明の近くで汗を拭き拭きの作業であった。しかし、調査に慣れた人が多く、また、名古屋大学の学生を中心とするアルバイトの補助員も、てきぱきと仕事を進めてくれたので、調査は快調に進んだ。

初日の調査が終わったところで、藤園堂ご一家の心尽くしの夕餉をご馳走になった。本来なら調査をさせていただく我々が、おもてなしすべきであるのに、逆に世話になってしまい、一同恐縮したことであった。しかし、その夜の会は、大変和気あいあいの中で行われ、思い出に残るものであった。このようにして調査は、予定以上の点数のカード化を終わり、二十四日に前半の幕を閉じた。

後半の調査は、予定通り八月二十日から始まった。早川・母利両氏は、都合がつかず不参加であったが、前半に調査がかなり進んでいたの、余裕を持って残りの調査を行うことができた。ただ、撮影は一点一点の丁数が少ないた

め、ターゲットを挟んだり、カメラの調節を行ったりなどに手間取り、最終日夕刻までかかってしまった。

この十一日間、健氏はほとんど調査に付き切りで、資料の出し入ればかりか、間紙入れやその取り出しまで手伝って下さり、申し訳ないことであった。また、資料についての質問をすると、その都度、丁寧な説明をして下さり、実物教育がいかに有効かということ、今更のように痛感させられた。

例えば、井上士朗関係の俳書の表紙には、その多くに刷毛で斜めや横の線が入っている、と何点かの俳書を示しながら教えて下さった。さりげない言葉の端々に、多くの資料に当たって初めて分かるような、指摘が含まれている健氏の話聞くのも、今回の調査の楽しみであった。その後、健氏は、少し体調を崩しておられるようであったかと心配している。一日も早い本復をお祈りしたい。

四

今回、調査した六百点の内、目についた資料のいくつかを紹介しておこう。古いところでは、清水

春流編「尾陽発句帳」がある。慶安五年（一六五二）の刊で、尾張俳書の最初のもの。藤園堂文庫本は上巻のみであるが、都立中央図書館加賀文庫に下巻が蔵されており、いずれも天下の孤本である。上巻は、紺色万字繋ぎ唐草文空押し表紙を持ち、原題簽を備えた美本。この書は、近世文学資料類従の仮名草子編（17）で、加賀文庫本とともに使わせていただいたことがある。私にはなつかしいものである。

吉田友次編「阿波手集」は、寛文四年（一六六四）の刊で、春・夏・秋・冬の四巻からなる。藤園堂文庫本は夏の巻を欠き、春の巻に四丁の落丁があるが、この書も伝本の極めて少ないものである。名古屋は、「冬の日」を刊行したこともあって蕉風発祥の地とされ、そのためにこの地に因む蕉門俳書の数も多い。その中で珍しいものを、二三取り上げてみよう。東藤編「熱田賦笥物語」（元禄八年跋）は、現存の知られたものが五本あるが、藤園堂文庫本は、原表紙・原題簽付きの初印本である。

荷兮編「ひるねの種」（元禄七

年序)は、藤園堂文庫本の外、四本

が知られるのみであり、「青葛葉」

(元禄十二年序)は、藤園堂文庫

本の外、天理図書館に一本が伝存

するのみの稀本である。「冬の日」

「春の日」「曠野」と、次々に蕉門

俳書を編んだ荷兮ではあったが、

「曠野後集」以後次第に芭蕉との

距離を大きくしていくので、この

二つの俳書には、かつての荷兮の

輝きが見られない。しかし、尾張

蕉門や荷兮の研究には、見落とせ

ぬ資料である。なお外にも、取り

上げるべき蕉門俳書は多いのであ

るが、この辺でとどめておきたい。

その外、「茶のさうし」(元禄十

二年序)、「誹諧曾我」(同年序)、

「きれく」(同十四年序)、「三河

小町」(同十五年刊)など、三河

の太田白雪の主要作品も揃ってい

る。また、芳賀敏士編「俳諧白眼」

(同五年刊)は天下一本、「元禄拾

遺」(同九年序)も珍しいもので

ある。東鷲・露川・巴静・越人・

也有・暁台など、尾張の代表的な

俳人資料も主なものは集められて

いる。更に、まとまったものとし

ては、露川・巴静・木兎などの歳

旦や鳴海歳旦などがあるが、これ

らも尾張俳壇の研究には欠かせぬ

資料である。

もう一点、自筆ものを紹介して

おきたい。「暁台十三番句台」(仮

題)は、暁台判の句合で、句題は

陽炎と猫の恋。見返しに月樵の猫

の絵があり、全長四メートルの巻

物。本文は暁台の自筆で、なか

かの美品である。

以上、私の眼についたものを拾

い出してみたのであるが、質量と

もに充実した藤園堂文庫を、わず

かなスペースで紹介することはと

うてい不可能であり、すでに与え

られた紙幅も尽きた。詳しくは「解

題」や資料館の目録などを、ご覧

いただきたい。いずれにしても、

藤園堂文庫の調査に携わった十一

日間は、貴重な資料の山に囲まれ、

親しい仲間と過ごした幸せな日々

であった。

最後に、何かとお心遣いをいた

だいた藤園堂一家のご厚志に、

深甚の謝意を表したい。

(愛知教育大学教授)



文庫紹介 ⑫

岩国徴古館

岩国市の城址公園の一角に、周防国岩国藩主吉川氏に伝世した美術品及び歴史資料を収める岩国徴古館がある。同館は昭和十五年吉川家第三代朝経(梶原景時の乱の武勲により播磨福井莊地頭職を得る)の七百年祭が挙行された際に設立された財団法人吉川報効会の主たる事業として、戦時下に建設・経営され、昭和二十六年に市に寄附されたものである。収蔵資料は絵画・工芸・古文書・典籍・郷土資料など七千二百余点を数える。当時の受託目録(□)がすなわち図書目録となっており、公刊された目録類は存しない。山口女子大学国文学科編の「山口県に伝存する国語学・国文学・国語教育関係文献(写本・版本)目録」(一九八一年刊)に国文学関係書目の抄録がある。

吉川家歴代は文武に秀でる者多く、応仁の乱で勇名を轟かした十一代経基筆の古今・拾遺・詞花集が伝わる。また元春が尼子富田城攻めの陣中で写した太平記は、右田弘詮が大永二年に写した吾妻鏡とともに重文指定を受けている。この他にも、毛利輝元息女が広正に嫁いだ際の嫁入本に河内本源氏物語があることも周知のところである。永禄三年写の袖下、天正十一年写の鹿芥抄目録など能楽関係の書籍にも見るべきものが多い。山口県教育委員会の「山口県歴史資料調査報告書第三集吉川家歴史史料目録」(昭和五十九年刊)に詳しい。

当館の調査・収集は継続中で四五点の書目がマイクロ目録七八年度版に載っている(調査カードは徴古館分五二九点、吉川家分一八八点である)。

所在地
〒741 岩国市横山二一七一九
月曜・祝日休館。
電話 〇八二七(四二)〇四五二
(文献資料部 山崎誠)

— 共同研究報告 —

中世における

能とその環境

武井 協三

昭和六三年十一月より平成元年三月まで、当館に客員教授として赴任された、カレン・ブラゼル・コネル大学教授を中心に、表記の共同研究が行われた。

計四回の研究会がもたれ、毎回約一時間の報告、二時間近くの討議が行われた。第一回はブラゼル教授から、御自身の研究の概要と、この共同研究を能の周辺からのアプローチと位置付けたい旨の希望がのべられ、そういった方向が確認された。第二回は松岡心平氏(東京大学専任講師)が「能の成立と仏教—勧進の場を中心として」、第三回は小峯和明氏(当館助教)が「天狗と修羅について」と題して、それぞれ報告された。第四回はゲスト・スピーカーとして、東京国立文化財研究所芸能部部長佐藤道子氏を迎え、「悔過会」についてのお話しをうかがった。

いずれも、能をその周辺から掘り起こしていく、刺激的でかつ可

能性に満ちたお話しであった。出席の研究員からも活発な発言があり、学際研究の楽しさと有効性を確認した共同研究であった。なお前記以外のメンバーは、次のとおりである。

ジャネット・ゴフ

田代慶一郎(筑波大学教授)

福田秀一(国際基督教大学教授)

小山弘志(当館教授)

武井協三(当館助教)

樹下文隆(当館助手)

百人一首古注釈の研究

菊地 仁

中世の注釈世界に対する関心は近時、ますます強まりつつあるように思われる。古注釈の持つ学際的拡がりや古今集・伊勢物語・和漢朗詠集などで特に顕著なわけだが、百人一首においてもそれは訓詁注釈の域を越えた様々な問題を孕んでいる。百人一首の注釈集成も出版企画されるといふ研究史的状况に鑑み、改めて基本資料を含めた整理・再検討を目的として本共同研究は出発した。

以上の経緯を踏まえ、第一回の研究会(昭和六十三年五月)にお

いて、本共同研究の具体的方向として次の二点がメンバーの間で確認された。

1 百人一首注釈および関係論文の収集と整備

2 輪講形式による未紹介資料の研究

1については主に国文学研究資料館所蔵の文献・紙焼を手がかりとして断続的に行なっているが、特に室町時代の資料については目立った成果を挙げないでいる。研究論文については、百人一首の周辺まで収集対象とした広範囲の目録作りを完成させたいと思っている。

2については、中古・中世・近世にまたがる本メンバーの特性を最大限生かしてうる素材を探していたが、新出資料としてへ中院通茂卿家伝二条家百人一首秘事を所蔵者の御好意により研究対象とすることができた。まだ完全に読み通していないので断言はできないが、中世と近世との狭間に位置する過渡的資料としてきわめて貴重な注釈書と思われる。いずれ本共同研究の成果の一つとして、何らかの形にまとめてみたいと考えている。

願文の総合的研究

小峯 和明

本共同研究のメンバーはそれぞれ各地に分かれて住んでいるため、当初予定していたほど頻繁に集まることは不可能だったが、積み残した作業は今後も折りをみて継続してゆく予定である。

一昨年度の共同研究では「本朝文粹」の願文に焦点を絞ったが、今回は国語学や歴史学のメンバーの参加を得て、より広い視点から総合的、多面的に願文の意義をとらえることを目標にした。予算の制約でわずか三回の会しか開けなかったが、今後の研究の足がかりは得られたように思う。

まず各自の問題意識や研究テーマに従って報告し、それにもとづき様々な観点から検討を加えた。「本朝文粹」の願文を一つの規範としつつ、それ以前の空海の「性靈集」や道真の「菅家文章」の願文、あるいは以後の「本朝続文粹」、大江匡房の「江都督納言願文集」、信西の「筆海要津」等々、主として平安朝の願文を中心に本文批評、表現様式、構成、修辭、故事

引用など、文学としての特質の一端を浮き彫りにした。ことに「白氏文集」や「文選」などの中国文学との密接な関連が改めて注目された。

また基礎的作業として平安朝の願文述作の略年譜や「本朝文料」所収願文の一字索引、あるいは院政期から中世の唱導世界の中核となる安居院流の澄憲の年譜なども作成、今後の研究の大きな指針を得ることができた。

一方、女人往生をめぐる罪障など、願文研究の基底ともなる思想認識の分析も宗教史的観点から試み、追善願文にかかわる葬送の実態や法会の場等々、願文をかたどる時空・習俗などにも論議が及び、「法会文学」という規定について議論が伯仲した。

当時においては一級の晴れの文学でありながら、文学史から黙殺されていた感のある願文の意義を本格的に追求する機会が得られたので、今後さらに検討を続け、共同の成果及びメンバー各自の研究をもとに、願文の注釈・研究論文・資料紹介・翻刻・年譜等々を網羅した「願文の総合研究」を公刊する予定である。

近世九州の文人研究

宮崎 修多

青木正児、中村幸彦両氏による彼我の文人の在り方の概括的指摘は、それまでの儒者文人個別の伝にない鮮やかな俯瞰を我々に示したものであったが、研究の細分化とともに個人の年譜作成など対象が再び小さな域に留まらざるをえなくなった現在では、文人研究といえどもひたすら一人の行蔵を追究することにより、たばしる溪流のほんの一掬から自然の清冽と豊潤を感じるに似た所為に出るほかはない。一個人の行跡を刑事よろしくかぎつける事は決して意味のないことではないが、やや忸怩たる思いのこのる我々はそこにあらたな尺度を盛り込もうとした。すなわち都鄙の問題である。

文人、とりわけ儒者漢詩人を多く輩出した九州文芸界は近世のみならず明治以降の文芸、政治にも大きく影を投げかけ、一部それらの跡付けはいわゆる郷土史の域において昭和初期の時点でかなりな水準に達してもいる。逆に戦後益々闡明の度を増した三都を中心とした近世文壇史上にみえる西国の

人びとはその興味ある横顔を一寸覗すだけに終始していた。最近の「中央と地方」論でも唱えられる、参観交代による人間と文物の都鄙の間での流通が想像以上に互いの均質化を促していたという議論を踏まえるならば、例えば国元の藩儒の世子侍読役や林家入門による東上もその一翼を担っていたに相違ない。また好学の諸侯は在国時にも江戸の文化水準をその周囲に絶えず維持させることを要求した筈であり、その埒内にいた儒者はたとい東都の空気に触れずともそれに近い文雅の境を味わうことにもなったであろう。かくてそこには都鄙という二元的把握のゆらぐ気配さえ漂う。

かく都鄙の尺度をあてがうことによりおのずから旧来の文人像に新たな面目を見出しうることを期してさだめた対象は各々次のことである。中山は化政期筑後柳川藩公子立花蘭齋（藩主立花鑑賢義弟）をとりあげ、同藩江戸留守居役西原梭江とともに馬琴ら江戸俗文学界に親炙したとことと柳川文壇とを相対化しようとする。若木は、享保期江戸の中国癖旺盛な荻生徂徠ら護園の社中と華音を通して交

誼をかさねた肥前蓮池藩龍津寺積大潮の、とくに長崎文化との接触について視る。かかる僧侶の行雲流水にいざなわれた身軽な周旋ぶりは化政期豊前の画僧雲華など多くの例を挙げ得るが、都鄙間の芸文移入の筵としてもまた無視できない。井上は年来の調査に係る肥前鹿島藩主鍋島直条の文事を辿ることにより元禄期の雅俗文壇を江戸鹿島両地にわたり大きく照射しなおす。そこにはとくに林家の芸の洗練された趣味のあわせ浮かび上がって来ることにも注視したい。宮崎は寛政から文化にかけて筑前秋月藩儒という地位にありながら生涯詩歌でしか自己を語らなかつた原古処をとりあげ、一見中央と余り関係のないかれの内部に、実は絶えず東都詩壇が意識されてきたことを遡求しようとする。

個々の調査のいわば副産物として参考文献リストを作成することにしたが、目下単行本に限りカード化を進めている。また如上の成果の一部は井上「鍋島直条と俳諧」（江戸時代）、宮崎「祭酒期の原古処とその周囲」（福岡県史）などに活かされる予定である。

新収資料紹介①

百人一首螢火編

大本一冊（その請求番号は「タ2-71」）。江戸後期以降の写本。題簽や内題、序跋等は一切なく、尾題に「百人一首螢火編」とあるのみ。表紙は茶色の格子縞文様で、寸法は縦二六、七cm×横一九、四cm。装丁は袋綴。料紙は楮紙。紙数は全三十二丁（丁付アリ）で、遊紙はない。惜しいことに虫損があり、全丁に亘って補修がなされている。本文は漢字混りの平仮名で、百人一首の作者名及び歌を各一行書きにし、その後小さめの字で短い注並びに解釈を載せる。なお作者名の下には、割注で略伝が書かれている。歌の頭には一から百まで漢数字で歌番号が付されている（欠歌ナシ）。ただし五十一・五十五番歌には番号不記載。九十七番歌には誤って九十八とある（重複）。また四番歌と十二番歌には、別筆（漢字混り片仮名）の付箋がある。これは、該当歌に本居官長流の口語訳（本居大平の「百人一首梓弓」か）を施したもの。

ただし十二番歌にある付箋は、本来は一番歌に貼るべきものである。来は一番歌に貼るべきものである。

かもしれないのである。そのためあえて安価な本書をここに紹介しているわけである。

本書の著者を知る手がかりは、

しかし同一と認定する証拠は、

林笠翁（岡村良通）の随筆「仙台間語」及び「寓意草」にある。両書には百人一首に関する記事が見られるのだが、契沖の「百人一首改観抄」を批判している部分に、「螢火編」（延享三年頃成立）なる笠翁の著作名（百人一首注釈書）があげられている。しかしながら、

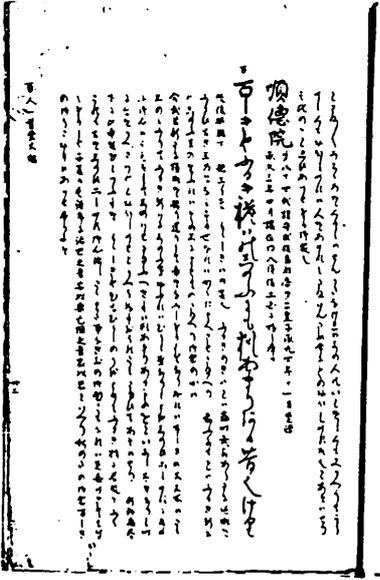
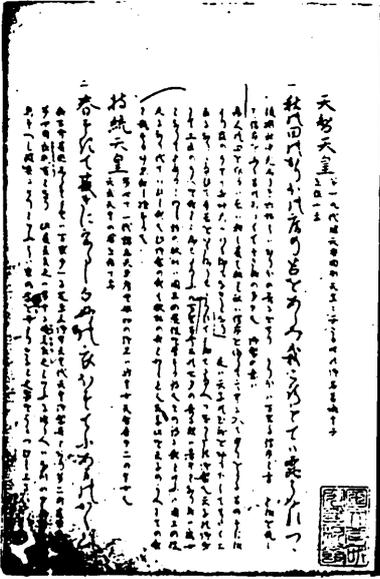
書名の一致以外になにもない。かろうじて能因法師歌に、「山は紅葉の落り乱ひ、川は錦の乱れながる」とよものけしきを広くよめり」とある注が、「仙台間語」にそっくりそのまま、「山は紅葉の落り乱ひ、川は錦の乱れ流るると四方の秋色を広くよめる也」と出ているだけである。わずかな点であるが、この一致によれば「螢火編」と認めてよいのかもしれない。

は、林笠翁著の「螢火編」であろうか。あるいは同一書名の別種であろうか。今後、更に同写本が見・紹介されることを期待したい。もしこの点が明らかになれば、改観抄の版本出版時における改訂の謎が、多少なりとも解明されるかもしれないからである。

「改観抄」を批判している部分に、「螢火編」（延享三年頃成立）なる笠翁の著作名（百人一首注釈書）があげられている。しかしながら、国書総目録等には一切記載されておらず、その存在は今まで全く不明であった。その幻の「螢火編」が、新収の百人一首螢火編である

はたして新収の百人一首螢火編

は、松野陽一氏の「林笠翁伝考」（東北大学教養部紀要四五）を、改観抄との関連については、拙稿「百人一首改観抄」の諸問題」（立正大学国語国文二五）をそれぞれ参照して頂きたい。（文献資料部 吉海直人）



新収和古書抄 昭和六十三年

勝語集 二巻二冊

諸尊法に関する東密広沢流の口

伝書(保延元年勝定房恵什語・寛印記)。徳治三年写の識語あり。宝

志和尚伝など説話文学との共通話

古今和歌集抄 写五冊

外題「古今集頭昭抄」とあり、

頭昭注である。各冊末尾の「良淳」

(平間長雅)の鼎形朱印と墨付紙

数注記から長雅手摺本と知られ

る。宝永頃の写か。序注末尾にの

み弘安五年雅有奥書あり。本文は、

第一〜四冊(序〜巻十六)は雅有

本頭昭注だが、第五冊(巻十七、

二十、奥書)は頭注密勘本文の取

り合せ本である。

政宗卿百年忌勸進和歌 写一冊

享保二十年五月二十四日、伊達

五代藩主吉村の勸進による藩祖政

宗の百回忌追善和歌。郭公催懐旧

の出題は冷泉為久。公家・諸候・

と政宗辞世を冠に置く吉村の三十

一首詠。原本は松島瑞厳寺蔵。本

書は伊達家の手控本か。土庶詠に

江戸歌壇の顔振れがうかがえる。

新撰菟玖波集 刊十冊

連歌集。二十巻。紺表紙、中本。

明応四年序、作者部類を付す。刊

記は無いが寛保三年板と同板。渡

辺千秋蔵書。「小汀文庫」の長方

朱印を捺す。

酒伝童子 一軸

縦三四・四×本文全長九四四

浬。室町物語。紺地水玉の紙表紙。

料紙は緑・青・白等の色変りで、

金銀泥で草花の下絵がある。本文

秘伝を収めたものは例がなく、元

頼伝書(原形を知る上で貴重な写

本。但し「大事条々」に相当する

箇所は十条を収めるのみ。

周易 六巻三冊

魏王弼注。古活字伏見版。表紙

は栗皮色無地の表皮を残した改

装、題簽欠。慶長十年西笑承兌の

刊語あり。「大垣文庫」(方、朱)

ほかの印。巻一32才匡郭外に活字

で「乗正作承」とする。

栄花物語 四〇巻二〇冊

歴史物語。古活字版、十一行本。

「古活字版の研究」に所載の図

版と同版。「元和寛永中の間の版

と認められる」と云う。改装裏打

印記「岡田真之蔵書」。

夢遊集 四巻合一冊

題簽「ねねさめ草 二(二)双辺」。

内題「夢遊集卷之一(三・四)」。

刊記「寛文十三癸卯春吉旦 松会

開板」。上方版の「夢遊集」を字

詰を密にして版を作りなおし挿絵

を新挿、四巻に仕立て、外題のみ

「ねねさめ草」とした江戸版を後人

が合冊したもの。

頼朝三代記 四巻合一冊

題簽頼朝頼朝三代記 四(一)双

辺。刊記「宝永六歳九月吉祥

日 大坂心齋橋筋安堂寺町秋田屋

／大野木市兵衛板行」。裏打本。

挿絵後人の筆彩あり。

頼朝鎌倉実記 五巻合一冊

浮世草子。其碩・自笑序。享保

十二年正月八文字屋八左衛門版。

粗本で巻末をコピーで補充。八文

字屋本中伝本の少ないもの。

都名物露休しかた咄 半紙本合一

冊。咄本。五巻62話の内、巻五欠、

他巻若干の落丁あり。従来「露休

ばなし」の改題本に「軽口あられ

酒」と本書があると云われていた

が、全くの別書である。

役者家形独案内 一枚

歌舞伎一枚刷り。嘉永五年正月

大新版。幕末期在阪の役者の住

所を、双六形式で描く。戒橋より

ふり出し、各役者の居宅をまわっ

て、中の芝居が上りとなる。

委員会日誌

昭和六十三年

9月1日 国際日本文学研究集

会委員会(第二回)

10月28日 国文学文献資料調査

員会議(九州地区、

中国・四国地区)

11月11日 国際日本文学研究集

会委員会(第三回)

12月6日 共同研究委員会(第

二回)

1月26日 国文学文献資料収集

計画委員会(第二回)

2月9日 大学院教育協力委員

会(第一回)

2月15日 共同研究委員会(第

三回)

3月10日 情報処理システム運

用委員会(第二回)

3月16日 古典籍総合目録委員

会(第一回)

評議員会議の開催について

本年度第二回評議員会議が、昭

和六十三年十月三日(月)に開催

され、議事は、国文学研究資料館

次期館長候補者の選考について協

議が行われた。

本年度第三回評議員会議が、平

成元年三月二十三日(木)に開催

され、議事は、管理運営の概況、

平成元年度予算内示及び科学研究

費補助金、平成元年度事業計画等

について協議が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第二回運営協議員会議

が、昭和六十三年九月五日(月)

に開催され、議事は、管理運営の

概況、昭和六十二年度事業報告、

昭和六十四年度概算要求について

協議が行われた。

本年度第三回運営協議員会議

が、昭和六十三年九月二十七日

(火)に開催され、議事は、国文

学研究資料館次期館長推薦候補者

の選定等について協議が行われ

た。

本年度第四回運営協議員会議が

平成元年一月九日(月)に開催さ

れ、議事は、教官人事、館長選考

に関する申合せの改正等について

協議が行われた。

本年度第五回運営協議員会議が

平成元年三月二日(木)に開催さ

れ、議事は、教官人事、管理運営

の概況、平成元年度予算内示及び

科学研究費補助金、平成元年度事

業計画等について協議が行れた。

外国出張

研修旅行

安永 尚志

渡航先 イスラエル・連合王

目的 第9回国際コンピータ

通信会議出席及び連合

王国、フランスにおけ

るフルテキストデータ

ベース調査研究

期間 昭和63年10月29日〜昭

和63年11月14日

外国出張

安永 尚志

渡航先 連合王国・西ドイツ

目的 東京外国語大学科学研

究費補助金による連合

王国、西ドイツにおけ

る学術研究体制調査

期間 平成元年1月28日〜平

成元年2月11日

人事異動(昭和63年9月〜平成元

年2月)

(転入) 昭和63年10月1日付

文部教官(文献資料部教授)

松野 陽一(東北大学教授)

(併任) 昭和63年10月1日〜平成

元年3月31日

文部教官(文献資料部助教授)

船城俊太郎(新潟大学助教授)

(転入) 昭和63年12月1日付

文部事務官(庶務課長)

井上 憲雄(函館工專より)

(転出) 昭和63年12月1日付

文部事務官(庶務課長)

國井 和朗(宮城工專へ)

国際日本文学研究集会議(第12回)

あいさつ 小山弘志

研究発表

中国古典美学と日本民族自然美観の形成

楊 水良

明石一族にみられる血の誇り

金 順姫

明石尼君を中心に――

林 正子

「舞姫」のポリフォニー

谷 学謙

現代日本文学における眼差し

望月洋子

幕末に来日した人々と文学との出会い

トビアの概念

――安定へのなつかしさ――

スーザン・ネピア

芭蕉の季節感

――時雨と五月雨を中心に――

愈 玉姫

歌舞伎の中の「いき」

――上方と江戸に於ける助六劇の違い

エミ・シンチンガー

黒本・青本と浄瑠璃絵巻し本

――黒本「こく性や合戦」をめぐる

高橋則子

公開講演

阿修羅の変容

――須弥山の海から日本の舞台まで――

カレン・ブラゼル 郡司正勝

風流と見立て

カレン・ブラゼル

郡司正勝

記録

日程および研究会の経過

参加者名簿

利用者へのお知らせ

◆西尾市立図書館のサービス区分変更について

これまで西尾市立図書館（岩瀬文庫）のマイクロ資料のサービス区分は、「A」（ポジフィルム・紙写真・電子複写―いずれも可）でしたが、このたび西尾市立図書館のご意向により、「B」（紙焼写真・電子複写―可）に変更になりました。今後はポジフィルム作製の複写サービスはできなくなりました。なお、これに該当する西尾市立図書館の資料は「マイクロ資料目録一九八四年」（第8冊）に収録されています。

このたび「マイクロ資料目録」
「逐次刊物目録」の最新版が刊行
されましたので、ご案内いたしま
す。

(1) 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八八年（第12冊）
この目録には、二三所蔵者（文庫）分、七、二二〇点が収録されています。そのうち一〇所蔵者（文庫）が、今回新たに収録されるものです。

収録所蔵者（文庫）は、次のとおりです（*印は新規収録分）。

市立図書館の資料は「マイクロ資料目録一九八四年」（第8冊）に収録されています。

- 33 東洋文庫
- 48 名古屋市蓬左文庫
- 55 陽明文庫
- 56 市立函館図書館
- 92 上田市立図書館（花月文庫）
- 219 麗沢大学図書館（田中文庫）
- 223 * 山口大学附属図書館（紫蘭文庫）
- 224 * 熊本大学附属図書館（北岡文庫）
- 242 京都女子大学図書館（吉沢文庫）
- 243 彦根市立図書館（琴堂文庫）
- 244 大阪女子大学附属図書館

253 岐阜市立図書館

257 大和文華館

259 * Ruhr-Universität Bochum

Dep. E. A. Studies

268 宇部市立図書館（新井文庫）

269 * Seoul National University

Library

270 * 東京都立中央図書館（特別

買上文庫）

271 * 多和文庫

273 * 松宇文庫

276 * 加賀市立図書館（聖藩文庫）

* 大方保

71 * 若松若太夫

(2) 国文学研究資料館蔵逐次刊行

物目録一九八九年

収録誌数は、前年分より八二誌

増え、三、三三六タイトルで、昨

年十二月末までの受入れ分が収録

されています。

◆マイクロ資料目録の市販につい

て

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八七年（縮刷版）」第

11冊）が笠間書院より刊行され市販されています（定価六、五〇〇円）。既刊十冊とあわせて御利用

ください。

◆閲覧室休室日のご案内

①日曜日・国民の祝日・振替休日

②毎月末日（土・日の場合は、直

前の金曜日）

③書庫くん蒸期間（四月三〇日）

五月四日）

④年末年始（二月二七日～一

五日）

⑤蔵書点検期間（三月二五日～三

一日）

⑥その他

本年一月から国の行政機関は、

第二・第四土曜日が閉庁となりま

したが、当館は従来どおり土曜日

も閲覧業務を行っております。

なお、土曜日の閲覧業務につき

ましては、目下検討中です。

◆文献複写料金の改定について

当館の文献複写料金は、文部省の定めた国立大学附属図書館等統一料金表によっていますが、四月から消費税導入に伴い、文献複写料金が改定となります。詳しくは、閲覧室の掲示板、又は「資料利用案内一九八九年」の8ページをご覧ください。

◆所蔵目録刊行のご案内

244 大阪女子大学附属図書館

・「二葉抄」（三条西実隆写）

・「周易」（刊・伏見版）

平成元年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。

以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定なしか、または大会期未定。

解釈学会 ①千一〇千代田区神田

田神保町二一四六第二十勝ビル
教育出版センター新社内②八月二一〜二二日③未定

近代語学会 ①千一六〇新宿区北

新宿三一〇一〇一五〇七
国語学会 ①千一〇千代田区神

田錦町三一十一武蔵野書院気付
②五月二〇〜二二日③武庫川女子大学

古事記学会 ①千一五〇渋谷区東

四一〇一八国学院大学文学部
部日本文学第二研究室②六月一

七日〜九日③奈良県立橿原文化会館(一七日)薬業会館(一八日)

古代文学会 ①千一九三八王子市

桐田町五六一七工藤隆方
上代文学会 ①千一五四世田谷区

駒沢一―三―一駒沢大学文学

部小野寛教授研究室②五月一三

一五〇③三重大学人文学部

説話文学会 ①千四五三名古屋市中村区稲葉地町七一一同朋大学

文学部国文学科沼波研究室内②六月二四〜二六日③同朋大学

全国国語国文学会 ①千一〇
一〇千代田区猿樂町一―三―一桜楓社気付②六月一〇〜一一日③成蹊大学

中古文学会 ①千一五〇渋谷区東

四一〇一八国学院大学文学部
部日本文学第四(小林)研究室

内②六月三日〜四日③早稲田大学大隈講堂

中世文学会 ①千一四一品川区大

崎四一―一六立正大学文学部
国文学科第一研究室内②五月二

七〜二九日③日本女子大学

日本演劇学会 ①千一六九新宿区

西早稲田一―六一早稲田大学演劇博物館内②五月二七日③日

本大学芸術学部(江古田校舎)
日本歌謡学会 ①千一五〇渋谷区

東四一〇一八国学院大学文学部
日本近世文学会 ①千一〇二千代

田区三番町六 二松学舎大学近世文学研究室内②六月一〇〜一日③東京学芸大学

日本近代文学会 ①千一二文京区白山五―二八―二〇東洋大学

文学部国文学研究室内②五月二七〜二八日③昭和女子大学

日本口承文学会 ①千一六〇新宿区西新宿八 四―五(財)ラ

ボ国際交流センター広報部気付
②六月三〜四日③山形県赤湯温泉

日本文学協会 ①千一七〇豊島区

南大塚二―一七―一〇
日本文学風土学会 ①千二二四川

崎市多摩区東三田二―一―一専
修大学文学部国文学研究室内②

六月二四日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会 ①千九八二仙台市青葉区川内東北大学文学部内

②六月一〇〜一一日③東北大学文学部

俳文学会 ①千六五一―一―一神戸市北区鈴蘭台北町七―一三一

一 親和女子大学国文学研究室内②

一〇月二一〜二三日③鶴岡市表現学会 ①千四八〇―一―一愛知

県愛知郡長久手町長湫片平九愛知淑徳大学内②五月二七〜二八日③愛知県婦人文化会館

仏教文学会 ①千六〇四京都市中

京区西ノ京壺ノ内町八一―花園
大学国文学研究室内 千一七四

板橋区高島平一―九―一 大東文化
大学文学部日本文学科関口研

究室内(支部)
万葉学会 ①千五六五吹田市千里

山東三関西大学国文学研究室内
美夫君志会 ①千四六六名古屋

市昭和区八事本町一〇―一 中京大
文学部国文学研究室内

和歌文学会 ①千一〇二千代田区

三番町六 二松学舎大学国文学
研究室内②五月三〇日③中央大

学会館(例会)

国文学研究資料館報 第三号

平成元年三月発行

編集・発行者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町一―一六―一〇

郵便番号 一四二

電話 七五七―一三―一四

印刷所 株式会社 三興